

アルケイアー記録・情報・歴史—
第11号 2017年3月 83-116頁
南山アーカイブズ

特集「資料論 I」

山内清男の縄紋文化モデルの難点

大塚達朗

南山大学人文学部人類文化学科

Deconstructing the idea of Jomon ‘Culture’: Revisiting the Model of Yamanouchi Sugao

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University

OOTSUKA Tatsuro

Archeia: Documents, Information and History
No.11 March, 2017 pp.83-116
Nanzan Archives

はじめに

I. 考古資料と型式

II. ハイパー縄紋文化

III. 山内清男の縄紋文化モデル

IV. 縄紋土器一系統説〔1〕一起源論の不可能性

V. 縄紋土器一系統説〔2〕一文様帯系統論の不可能性

VI. 縄紋土器一系統説〔3〕一型式の漸進的変化

まとめ

山内清男の縄紋文化モデルの難点

大塚達朗

はじめに

先史考古学を専門とする筆者にとって考古資料とは、モースに倣って、たまたま腐らずに残ったもので¹⁾、詳しくみれば痕跡的で断片的で匿名的なものとする（大塚 2007：184）。考古資料とは、すべてが不完全な存在で、それらが何であるかはにはわかにはわからず、それらについての情報がきわめて乏しいものであることを強調したい。考古資料のそのような性質を重く受けとめて、「考古学とは、どのような学問か」と問われれば、「考古学とは、外枠が人それぞれであるジグソーパズルのようなもの」と答えることにしている。ピース一つ一つが考古資料で、ジグソーパズルが研究ないしは分析で、外枠が認識枠ないしは参照枠である。ジグソーパズルの始めとして、そのような性質の考古資料から型式（いわば〈いつ、どこで、だれが〉の三要素を合わせ持ったもの）が制定されるのである。

I. 考古資料と型式

では、「型式とは何か」と問われるならば、痕跡的であり断片的であり匿名的であるという考古資料固有の性質から考えて、一つ一つではなく似たものを取りまとめて扱わねばならないことから要請されるのが型式である、と答えることにしている。型式は、第一に時空間を限定できる代表的な形質が探求されるべきなのである（ただし、選択すべきものは一義的には決まらな

い)。

また、型式は他者に対して整合的な説明が可能となるような有意な形質(時空間を限定できる代表的な形質)によって制定されるが、その有意な形質とは、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことを基準にして、層位的関係の判断と絡めた比較・照合作業からもたらされる。と同時に、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことから、必然的に一つの型式ではなくいくつもの型式が前後関係の判断とともに制定されることになる。したがって、型式を扱う研究は、型式編年研究として具現することになる。

とりわけ、層位的関係は型式編年研究の出発になる。だが、型式認識が進行しないと、層位的関係はそれとしての評価ができないために、層位と型式とは一見異なる事態のようだが、互いに一方が他方を根拠のうちに含みながら切り離しては考えられない。層位は存在論的に型式に先行し、型式は認識論的に層位に先行し、かつ、型式と層位は相互に他を前提とするという意味での循環関係にあるという次第である。

くり返すが、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉を整合的に説明できる部分は、さまざまな比較・照合作業を経ながら特定される。だが、その整合的説明を可能にする部分は、自ずと決まるのではなく、あくまでも研究者の視点・姿勢すなわち認識枠ないしは参照枠に依存するのである。したがって、型式は実体として発見されるものではなく、研究者の認識枠ないしは参照枠に応じて型式として構成されるものであることを強調したい。

さらにいえば、人工物である限り千差万別であることを免れ得ないために、型式を明示するためには、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことを代表しているかのような考古資料の現物を用いた“見本”ないし“サンプル”が必要であると同時に、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことに関する体系的でことこまかな説明が必要である。“見本”ないしは“サンプル”を観察しながら、詳細な説明をたどって行って、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことの認識に到達できる仕組みになっているのが型式のはずである。

型式についてまとめれば、以下のようなだろう。詳しくは拙著(2000)の

併読を希う。

- ①型式を扱う研究は、型式編年研究として具現する。
- ②型式は層位と対となり、互いに循環関係にある。
- ③型式は発見されるべき実体ではなく、研究者の認識枠ないしは参照枠に応じて構成されるものである。
- ④型式を明示するためには、“見本”ないしは“サンプル”が要請されると同時に、“見本”ないしは“サンプル”に関する言葉による説明が要請される。
- ⑤型式の“見本”ないしは“サンプル”の選定と体系的な説明は、研究者の認識枠ないしは参照枠に依存する。

したがって、その選定と説明には常に異論の余地がある。また、考古資料の現物を用いた“見本”ないしは“サンプル”は、それ自体人工物であるから千差万別であることを免れ得ないという意味でも、“見本”ないしは“サンプル”の代表性に関して常に異論が登場し得るので、種々異論の余地を回避しながら他者に分かるように型式をまとめなければならないと考える。

要するに、型式の議論は、認識枠ないしは参照枠から自由ではない。となると、本誌特集の「資料論」として考古資料を取り上げるのであれば、縄紋土器はふさわしいが、その認識枠ないしは参照枠である縄紋土器一系統説を取り上げる必要があると考える。〈日本列島の異なる地方からみいだされる縄紋土器は外見が異なっても縄紋土器である〉として理解されるのは、縄紋土器一系統説という枠組があるからである。

しかも、小論で縄紋土器と縄紋土器一系統説の双方を取り上げることは、考古資料の性質＝痕跡的で断片的で匿名的なものを熟慮してそうすべきというだけではない。日本考古学（敗戦後考古学）にたずさわる多くの研究者が、縄紋文化研究の泰斗である山内清男の縄紋土器一系統説の是非を問うことなく、縄紋土器一系統説に由来する長大な（より遡及的な）連続性認識を前提にして、年代の古さに拘泥するために、1万年以上続き、更新世と完新世にまたがってどのような気候環境下であっても継続していくという意味でのハイパー縄紋文化が（発見されたのではなく）はからずも生み出されてしまっ

たのではないかと、筆者が危惧していることも関係している（大塚 2013、2016）。

Ⅱ. ハイパー縄紋文化

1999年に、青森・大平山元Ⅰ遺跡出土の無紋土器付着物などを測定資料としたAMS¹⁴C年代とその暦年較正によって、当該無紋土器の年代が16000年前に遡る可能性が報告された（中村・辻 1999）。さっそく、16000年前に遡るといふ大平山元Ⅰ遺跡出土の無紋土器の年代観に依拠した春成秀爾（2001）（図1）によって、更新世と完新世にまたがって1万年以上もどのような気候環境下であっても継続していくという意味でのハイパー縄紋文化が描かれてしまったと指摘した（大塚 2013：130-131）。以後、春成（2008）においても、全く同様な縄紋文化が描かれた。そして、ハイパー縄紋文化が描かれる動向はとどまるところを知らず、今村啓爾（2014）においても、「年代的に一万年を超えて継続し、世界の時代区分でいう旧石器・中石器・新石器の各時代にまたがってひとつの縄文文化が続いたのである」と説明され、かつ、「縄文文化の驚くべき長さで持続性」（今村 2014：662）が強調された。二人のハイパー縄紋文化は、草創期から晩期の6大別のもと、以下の通り、よく似ている。

春成案：「（後期/晩期）旧石器時代」「中石器時代」「新石器時代」をカバー（地理空間：日本列島）

今村案：「旧石器時代」「中石器時代」「新石器時代」をカバー（地理空間：日本列島）

このように、更新世と完新世にまたがって1万年以上もどのような気候環境下であっても継続していくハイパー縄紋文化が描かれるのだが、どのようにして「驚くべき長さで持続性」が発揮されたのか、詳しい説明はない。

筆者の方で図1をみながら、ハイパー縄紋文化の謎解きをしたい。16000年BP（大平山元Ⅰ遺跡の無紋土器の年代観）を起点に、草創期から晩期まで

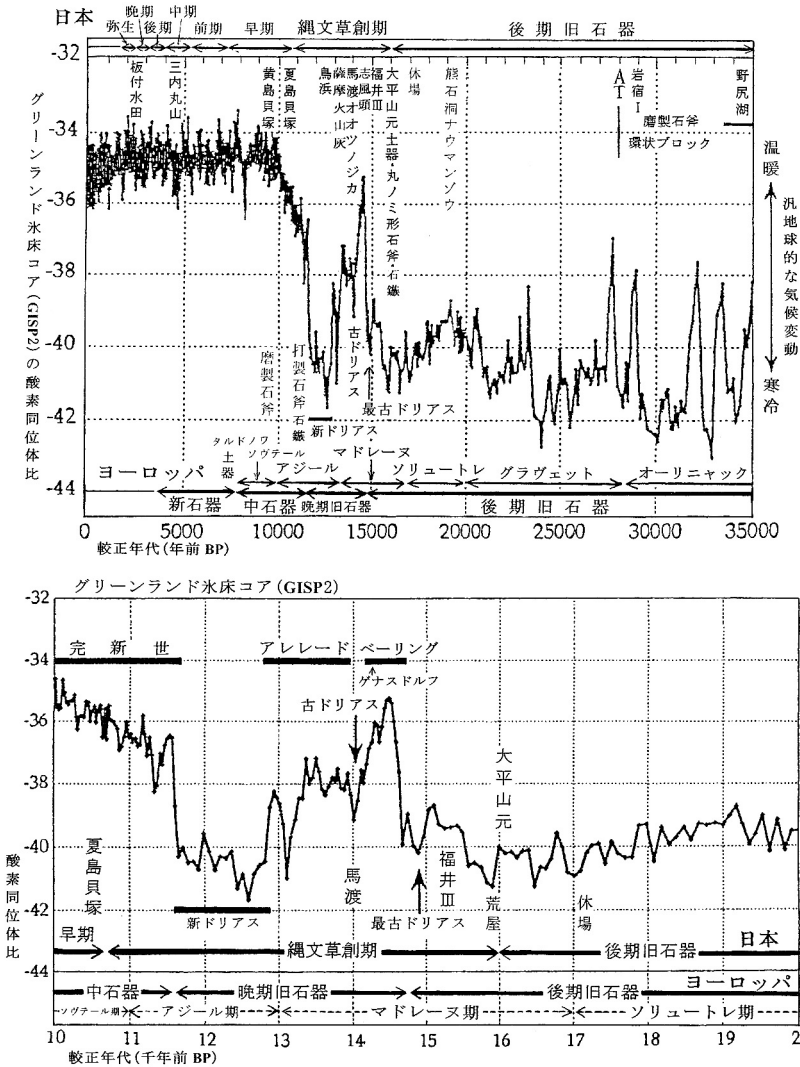


図1 春成秀爾によるハイパー縄紋文化 (春成 2001)

の気候変動グラフを上り坂・下り坂に見立てて、その上り坂・下り坂を上下動しながら移動する運動物体を想定するとわかりやすいであろう。上下動しながらどのような坂（気候変動）でも克服していく運動物体が、実は、縄紋文化となるはずである。ハイパー縄紋文化は、「驚くべき長さ」と持続性を発揮できる力すなわち環境克服力がある、ということになる。

佐藤宏之（2013）が、やはり大平山元 I 遺跡の無紋土器を嚆矢として1万年以上連綿と続くハイパー縄紋文化を、「古本州島」（最終氷期最寒冷期ころに指摘される朝鮮海峡と津軽海峡間の一つの大きな陸塊[完新世では九州島・四国島・本州島になる]）および「古北海道半島」（最終氷期最寒冷期ころに指摘される朝鮮海峡と津軽海峡間の一つの大きな陸塊に向かって大陸から南下するように延びる長い半島[完新世では北海道島と樺太島になる]）（佐藤 2013：39）から日本列島へ変貌することを氣にとめずに、措定している。佐藤（2013）の場合、実は、更新世に積極的に日本列島を遡及的に投影した仮想空間の中で、ハイパー縄紋文化が語られるのである。筆者は当該陸塊を「N島（日本島）」と呼ぶことにしているが（大塚 2014：3）、第四紀研究では、日本列島に至る地形形成史を俯瞰する視点として「日本島の生いたち」というものがある（成瀬 1977）。ところが、佐藤（2013）のハイパー縄紋文化のみならず昨今の旧石器時代研究では、更新世に想像された日本列島（「古本州島」「古北海道半島」）が疑問無しで措定されており（例、佐藤・山田・出穂 2011）、不可解である。

他方、春成（2001・2008）・今村（2014）は、更新世最終氷期最寒冷期ころに指摘される朝鮮海峡と津軽海峡間の一つの大きな陸塊に思いを致すことはなく、単純に、日本列島を遡及的に投影した仮想空間を舞台に、ハイパー縄紋文化を語るようで、ある意味で惰性的な言説といえよう。

ともあれ、ハイパー縄紋文化の特徴は、以下の3点にまとめられよう。

- ①縄紋土器一系統説——土器文化としての長大な（より遡及的な）連続性
- ②想像された日本列島——日本列島を所与とする地理的枠組あるいは遡及させるべき地理的枠組としての日本列島

③縄紋文化固有の環境克服力——異なる気候環境をくぐり抜けながら1万年以上存続する力

例えば、「一国史としての縄文文化論」(瀬口 2014: 20) という日本文化論的言説は、その①②③に特徴付けられるハイパー縄紋文化のもとで前景化された言説の典型であろう。そのような日本文化論的言説を生みだしてしまう契機が春成 (2001、2008)・佐藤 (2013)・今村 (2014) などであり、これからも、①1万年以上の長大な連続性を想起すれば、②想像された日本列島上で、③いかなる気候変動をものともしない1万年以上にわたる環境克服力を見込む言説が生み出され続けるだけであることは、日本考古学 (敗戦後考古学) にたずさわる人びとの間では、全く自覚されていないようである。

Ⅲ. 山内清男の縄紋文化モデル

春成 (2001、2008)・佐藤 (2013)・今村 (2014) などのハイパー縄紋文化には、実は、モデルがある。それが、山内清男の縄紋文化モデル (YSJモデルと呼ぶことにしている [大塚 2016]) である。山内の短期編年のYSJモデル (表1) は、年代観としてはいまや省みる者はいないが、それこそが縄紋土器一系統説本来のものである。

表1のYSJモデルは、山内本人の縄紋土器一系統説に基づいた草創期から晩期の6大別の縄紋文化を山内本人が説明したものである (山内 1969a)。表1によれば、無土器時代のほとんどが気候温暖な時代 (「最良気候の時代」) で、無土器時代末期および草創期以降は気候冷涼な時代が続いたこと (草創期「冷涼」、中期「冷涼」、後期「気候悪化始る?」、晩期「部分的?文化凋落」) を念頭において、一方で、縄紋文化の出現は気候冷涼化を契機とした「シベリアのサケ地帯」の新石器文化の伝来 (その年代は矢柄研磨器の上限年代2500BCによって画される) と説明され²⁾、他方で、縄紋文化の存続は冷涼気候への適応として説明され、そして、晩期亀ヶ岡式精製土器の移入・模倣現象から導かれた部族社会間の階層化 (山内 1930、1969a; 山内ほか 1971)

然的な帰結である。

では、山内清男の縄紋土器一系統説とは何かといえ、日本列島外から土器が渡来したことを契機に、列島内で独自の発達をとげた先史土器文化を想定する見方で、1930年代に固まった見方である。「縄紋土器文化は、対外関係が不明である一方、内部に種々の発達変遷を持って居る」（山内 1932b : 86）ことから、「この年代によっても地方によっても截然と分ち得ない一体の土器が縄紋土器なのであろう」（山内 1932a : 41）という認識となり、「縄紋土器は結局我々が想定して居るように一系統の土器だと認められるであろう」（山内 1932a : 40）という山内清男の見通しが、1945年以後、日本考古学（敗戦後考古学）にとってのパラダイムの一つとなったものである（大塚 2000）。

縄紋土器一系統説では、日本列島内での孤立的変遷が想定されるために、「縄紋土器の由来を知るには、先ず最も古い縄紋土器を決定することが必要である」（山内 1932b : 86）ことになり、しかも、「土器製作は最も古い時代に大陸から伝来したであろう」（山内 1932b : 86）から、最古の縄紋土器の究明すなわち渡来土器の特定および源郷土の特定が喫緊事となったのである。縄紋土器一系統説のコロラリーとして、最古の縄紋土器の究明＝渡来土器の特定および源郷土の特定という緊急課題が1930年代に出来たという訳であるが、1930年代から1945年まで（戦間期）、山内は、「折角古式と認めた土器が、これまでの如く、次ぎ次ぎ新発見の型式にお株を譲ることになるかも知れない。強いて縄紋式の底が見えたとは云い切れないのである」（山内 1932b : 89）と述懐したことに明らかなように、山内本人は、解決策を見いだせなかったのである。

1945年以降、縄紋土器の起源を探るという緊急課題への山内および山内以外の研究者の対応を振りかえると、概略は、つぎようになる。旧石器時代の存在を積極的に唱える芹沢長介とそれに反対する山内清男・佐藤達夫との間で、1962年に、大論争（芹沢 1962a・b・c；山内・佐藤 1962）が始まり、そして、1969年に、大きく異なる年代観に到達した、と。芹沢の長期編年案

では、「日本では約1万2000年前の旧石器時代晩期もしくは中石器時代になって土器の製作がはじめられ、約1万年もしくは9000年ごろからそれが縄文土器に発展したと考えられるのである（根拠は¹⁴C年代：引用者註）」（芹沢 1969：85）で、他方、山内の短期編年案では、「縄文文化の出現は、およそ前2500年ときまった（根拠は矢柄研磨器の上限年代：引用者註）」（山内 1969a：91）であった。

1960年代には、層位的所見・伴出遺物・分布の広さおよび¹⁴C年代などから、隆起線紋土器が最古の縄紋土器とみなされた。¹⁴C年代に否定的な山内は、隆起線紋土器や爪形紋土器や多縄紋土器および撚糸紋土器をまとめて、早期より前の大別として草創期を設定した（山内・佐藤 1962）。旧石器時代の存否問題も関係して、1969年には、隆起線紋土器の年代観が極端に別れ、隆起線紋土器を「旧石器時代晩期もしくは中石器時代」に位置付けてしまった芹沢の姿勢は、多くの研究者が隆起線紋土器を草創期に含めることに賛同したのとは違っていた。とはいえ、肝心なことは、縄紋土器一系統説が共有される中での論争であったことである。その結果、1969年の時点では、

- ①両極端な年代的枠組：芹沢の「約1万2000年前」／山内の「およそ前2500年」
- ②大ざっぱで対極的な原郷土観：芹沢の東アジア起源論／山内の北方シベリア起源論
- ③連続性の遡及的認識（最古の縄紋土器の追求）：大別としての草創期の普及（少数派としての「旧石器時代晩期もしくは中石器時代」）

が前景化されたといえる（大塚 2014、2015、2016）。以後の動向は、①における両極端さ、②における大ざっぱな対極さから、山内案も芹沢案も後景に移されてしまったといえよう。その代わりに、③から、草創期という大別のもと、縄紋土器の古さを考えることに力点が移った上で（¹⁴C年代の信頼性の向上が大きく関係する）、縄紋土器一系統説をすき間無く縦横に並ぶ土器型式群とみなすこと（縄紋土器＝型式群）が、主流の動きとして生じたといえよう。その動きの先に、春成（2001）があったと考える。

縄紋土器一系統説が縄紋土器＝型式群の謂であるという了解は、以下の発

言が証言である。

①a 相対年代ではほぼ一致しているものの、それを暦年代におきかえる時に何に信を置くかの問題で、短期編年と長期編年に分れることになる。

¹⁴C年代に信を置き、長期編年を唱える人々（芹沢長介、鎌木義昌など：引用者註）、それに疑問をもつ人々（山内清男、佐藤達夫：引用者註）に分れることになる。（藤本 1985：205）

①b この論争は国内の相対編年に関しては、細部ではともかく、大筋においてはほぼ一致に近い形である。それを暦年代にあてはめる際にどうすべきかというところで争われているものである。（藤本 1985：207）

② 縄文土器にはそれぞれの地域差があるが、全体として連続的な流れを形成し、列島外の土器からの影響はあったとしても大きなものではなかったと考えられている。（今村 2004：36）

春成（2001）以来のハイパー縄紋文化は、渡来土器を特定することおよび渡来土器の源郷土を特定することを横に置いて、縄紋土器一系統説を縄紋土器＝型式群と単純化したものであったことを指摘しておく。

そもそも、原理的に、層位別・地点別という違いが契機になって得られた良好なまとまりどうしを比較・照合しながら、〈他とは違う〉・〈相互に類似する〉ことを整合的に説明できる部分が特定されて型式となるはずである。したがって、どんなにすき間なく型式が縦横に並んだとしても、型式である限り型式相互には違いがあるために、型式群が一系統的に続くというのは、型式相互に違いがあることを直視せずに一系統とすでに解釈するからである。そして、そのような解釈が許されるのは、縄紋土器一系統説がすでに研究者間で参照枠となっているからにほかならない。

ハイパー縄紋文化は、縄紋土器一系統説という参照枠が最優先で、肝心な型式設定の原理が等閑視されており、型式相互の違いをもつことを整合的に説明できない。連続性の遡及的認識（最古の縄紋土器の追求）が研究者間で共有された中であって、縄紋土器一系統説が縄紋土器＝型式群の謂である限り、日本列島においてより古い年代を示す土器がみつければ、たちまち古式

の縄紋土器の位置が与えられてしまう仕組みになっているはずである。

小論での批判をまとめると、縄紋土器=型式群という縄紋土器一系統説は無根拠で、しかも、想像された日本列島や説明できない縄紋文化固有の環境克服力（既述参照）が組み込まれるために、ハイパー縄紋文化はつくづく無根拠といわざるを得ない。

では、山内清男本来の縄紋土器一系統説とは一体何であったのか、あらためて考えてみる必要があるだろう。

Ⅳ. 縄紋土器一系統説〔1〕一起源論の不可能性

山内は、1969年に、「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」とは別の論放「縄紋草創期の諸問題」で、矢柄研磨器などの渡来石器に注目した理由として、「縄紋文化には大陸との文化的交渉を示す文物は至って尠なく、長期間孤立して発達したように見えるが、少なくともその最初の段階には土器・石鏃等を持った大陸文化の伝来があったと考えたのである」（山内 1969b : 16）と説明し、「土器製作だけが伝来し、その後内地において形態・文様の細部が発達したと考えるに至った。渡来土器の見込みはなくなった。では石器では如何か。ちょうどそのころ草創期の土器を扱って居たので、これらに伴出する石器を観察することが出来、その中に渡来したと考えられる石器若干に遭遇した」（山内 1969b : 16）ことをあげた。大陸から土器が渡来し、それが列島内で在地化し、列島外からの影響を受けずに地方差に富む方向で推移したというのが、山内が本来想定した縄紋土器の来歴と発達・変遷のほうである。しかし、1962年に草創期を設定して以来、渡来土器をみつけようとしてもみつからないのであれば、縄紋土器の原郷土は、厳密には証明できないはずである。ちなみに、山内は、1967年に、「恐らく土器製作法だけが伝来し、多彩な形態装飾はその後内地において発達したろうと考えられるに至った。渡来土器は見込みがなくなった」（山内 1967b : 2）と発言した。草創期を設定した1962年には、すでに、「この間大陸方面に特定な石器類を持ち、

これらと類似する土器をも有するところがあれば、縄紋土器の原郷土に近いというべきであろう。しかし土器は地方的な変化を持ちやすく、石器ほど用途に則した形を保ちえない。土器では、同様なそ(邇)源の可能性はあるいはないものかもしれない」(山内・佐藤 1962 : 26) と、発言していた。

多くの研究者は疑問を持たないようだが、渡来土器がなくて土器製作だけが伝来して云々は、正に、ご都合主義の論法である。

ここで、縄紋土器の起源研究のロジックを述べてみたい。山内が説くような意味での一系統の縄紋土器を想起すると、ある時点で縄紋土器が存在するならば、当然ながら、その縄紋土器は直前のものから変化してきたものであり、かつ、これからの変化の元であるという存在性格になる。派生型であると同時に祖型でもあるこの二重性を帯びた縄紋土器から最古の縄紋土器を探求するとは、「これこれに変化の元である土器」を探すことである。だが、何から縄紋土器が始まったことをすでに知っていない限り、そのような特定はできる訳がない。「最古の土器の追求」は、「これこそが最古である」と知っていない限り、「これこそが最古である」とは決定できない仕組みの作業である。

ところで、ある時点で縄紋土器が存在するならばその土器製作に携わった集団の存在を前提とせざるを得ない。そうすると、土器製作技術は社会的に学習・伝習された知識である以上、縄紋土器を作ったその集団にその土器製作技術を教えたより前の世代の集団を想定せざるを得ない。しかも、そのような知識を有した前世代の集団がいたということは、さらにその世代と同じように土器製作技術を教えたより前の世代の集団のいたことを想定せざるを得ない。となると、「最古の土器の追求」は、このようにより前の世代へ前の世代へと、すなわちより過去へ過去へと果てしなく遡及していくしかなく、しかも、例えば「この集団が最初に土器を作り始めた」ということが既知でない限り、「この集団が土器を最初に作り始めた」という議論ができない仕組みになっている訳である。さらには、「この集団が最初に渡来してきた」ということをすでに知っていない限り、「この集団が最初に渡来してき

た」という議論ができない仕組みになっている訳である。あるいは、「この集団が最初に渡来してきて最初に土器を作り始めた」ということが既知でない限り、「この集団が最初に渡来してきて最初に土器を作り始めた」という議論ができない仕組みになっている訳である。であれば、「この集団が彼の地から最初に渡来してきて最初に土器を作り始めた」ということが既知でない限り、「この集団が彼の地から最初に渡来してきて最初に土器を作り始めた」という議論ができない仕組みになっている訳である。

要するに、山内が説くような意味での一系統な縄紋土器の起源つまり「最古の縄紋土器」を問うことは、このように延々と議論が可能であっても解答を出せる問題ではなく、一系統の縄紋土器の祖型の伝来とその源郷土を探ることは、原理的に不可能なのである。

V. 縄紋土器一系統説〔2〕一文様帯系統論の不可能性

1945年以降も、縄紋土器の由来は大陸のどこか北方の新石器文化にあり、それが日本列島に渡来し、列島内で変遷が完結していることを証明しようとした山内清男にとって（山内 1964a、1967a・b、1968；山内・佐藤 1964a・b）、由来が一つであることの証明のための論理と方策が文様帯系統論である。

「私は器形の変化等を消却して、文様帯の新生、分裂、多帯化等の歴史を追究し、縄紋土器全般に通ずる型式学的系統または紐帯あるいは筋金というべきものを考えている」（山内 1964c：178）という重要な解説がある。山内は文様帯に〈縄紋土器全般に通ずる型式学的系統・紐帯・筋金〉という存在性格を与えていることと関係して、果たして形態装飾のような形質と同じように文様帯は、たやすく知覚し認知しうるのだろうかという問題があることを述べたい。

まず、形態装飾が時空間上で有限なために（「縄紋土器の形態及び装飾の個々の性質はすべて時代と分布が限られて居る」〔山内 1932a：41〕）、型式は時空間上で有限な離散的存在である。しかし、山内にとって、外見上差異

を有する諸型式も、文様帯から見れば、相互の文様帯は「相同」であることから一系統であることを認め、その上、文様帯は大陸方面に起源を求める際の手がかりとなる。以下参照。

口頸部文様帯 器外面の装飾は特に文様をなす部分とそうでない部分に分れる。文様は各型式に認められるが、少数の例外を除けば、口頸部の狭い帯状の範囲に限られて居る。この文様帯は筆者の所見によれば、関東北の縄紋土器諸型式の年代的系列に沿って、始め単独に存し、後に他の文様帯を伴いつつ同じ位置に存し、遂に口端に向かって縮小し、消滅する一系統の文様帯（第一次文様帯）に属する。繊維土器の各型式の文様帯は互いに相同なものであって、その手法及び内容は最も適当に比較される。（山内 1929：23）

十四 関西又は大陸の土器と繊維土器諸型式とは、繊維土器の混入の有無及び第一次文様帯によって、比較の端緒を得るであろう。（山内 1929：30）

型式と文様帯とは、そのように次元を異にする概念である。そして、文様帯系統論は、文様帯すなわち「相同」な部位の連綿とした在り方から一系統を解説する研究分野になっている。山内にとって「相同」とは、由来を同じくするという意味での同一性であるから、“変化しない部分”といいかえられる。

他方、土器の外見すなわち形態装は変化が激しいと受け取っているから、山内の文様帯系統論は、縄紋土器全般を見渡しながら「比較解剖学」（山内 1964b：157）的所見に基づいて、“変化する部分”（形態装飾）と“変化しない部分”（「相同」：〈縄紋土器全般に通ずる型式学的系統・紐帯・筋筋〉）とを見極める“分類学”といえる。

山内は、「器形の変化等を消却」して、「比較解剖学」に比して文様帯の考究しているのであるから、外見で単純に判断してはいけないということを含意しているのである。図2をみれば明らかなように、〈ここが文様帯である〉的に単純に外見から判断せずに、土器個体を「解剖」しかつ他個体と比較し

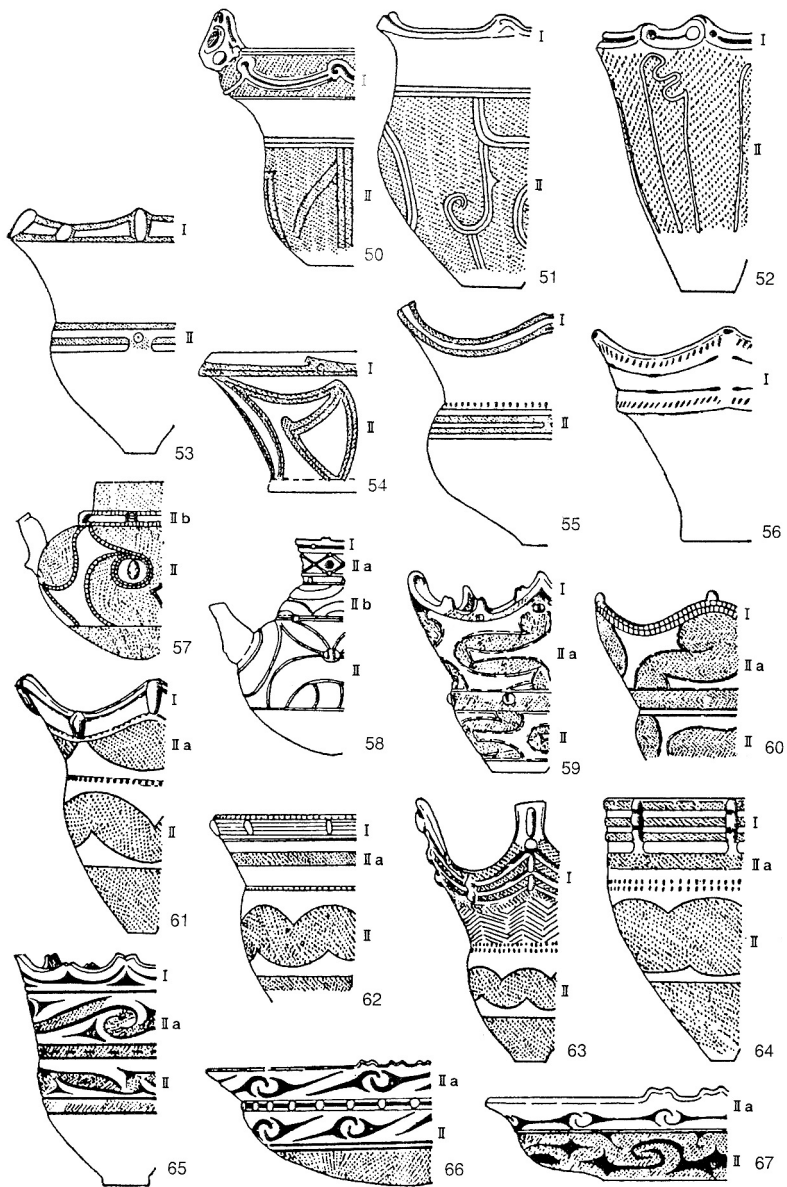


図2 山内清男による〈ここに文様帯がある〉的文様帯例 (山内 1964b [一部改変])

ながら文様帯の判断が〈ここに文様帯がある〉的に深まるというのが山内の論理である。しかし、残念ながら、山内の説く〈ここに文様帯がある〉的理路から様々な難問が発生すると考える。

第一に、単純に外見から判断せずに土器個体を「解剖」しかつ他個体と比較しながら、“変化する部分”と“変化しない部分”を見極めることはどうしたらできるのか、という疑問がわく。仮に山内にはできても、他人にもできなければ意味がないのだから、このような見極めが可能か否かだけの問題だけではなく、他人にも分かるのか否か、公共性の問題がでてくる。これこれが「相同」な文様帯であるという判断の妥当性は、他人も通用するか否かで評価すべきである。

しかし、〈ここに文様帯がある〉的文様帯が「相同」であることは、由来が同じという意味での同一性であるから、可視的な特徴としては捉えられないもので、山内にとっての「理論的存在」である。となると、非可視的である同一性を〈ここに文様帯がある〉的文様帯から他人を納得させる手だてはあるのだろうか。

土器個体を観察する限り、看取できるのは形態装飾である。形態装飾をこれこれ分類したという議論は賛成反対を別とすれば、他者にも判断可能である。形態装飾という外見すなわち知覚できる形質は時空間的に限定的なのだから、換言すれば変化に富んでいるのだから、山内のように限定的な存在の形態装飾を貫く非可視的な「相同」な部分があると説いても、他者からみれば、山内が“ある”という信憑を抱いているにすぎないと思われるであろう。

実際は、縄紋土器は一系統という見込み（山内 1932a : 40）が先行して、これこれとこれこれとが「相同」と見なすとしか思えないのである。実証的に「相同」が見極められ、それを帰納した議論ではないという点をもう少し詳しく論じたい。

見た目では分からない「相同」という由来上の同一性＝“変化しない部分”を窺うのが山内の紋帯系統論の最大の眼目であるが、山内は土器資料の内容が多岐にわたることを熟知していたから、文様帯にいろいろな変化があ

ること（「第一次文様帯」「他文様帯」）を当初（1929年）から積極的に認めた。また、古式土器群を認定し草創期の土器群を設定するようになるまでには、草創期の前半に独特な文様帯（「古文様帯」）があると認定した（山内 1960、1964bなど）。そして、縄紋早期以後に安定した文様帯を各種分類したことが（山内 1964b・c）（図2）——「Ⅰ. 文様帯」「Ⅱ. 文様帯」「Ⅱa. 文様帯」「Ⅱb. 文様帯」「Ⅱc. 文様帯」「副文様帯」、及び、「文様帯の新生、分裂、多帯化等」——、山内本来の文様帯系統論の破綻であると筆者は考える。

“変化しない部分”（同一性）をいい当てようとしたのが山内の文様帯系統論の本務で、“変化しない部分”を土器に即して説明したのが文様帯のはずである。しかし、たとえば、文様帯に違いを認めた分類（Ⅰ. 文様帯」「Ⅱ. 文様帯」「Ⅱa. 文様帯」「Ⅱb. 文様帯」「Ⅱc. 文様帯」「副文様帯」、及び、「文様帯の新生、分裂、多帯化等」）は、“変化しない部分”とみなした部分に実は“変化する部分”があったことを認めたことを意味する。

文様帯の中には“変化する部分”があることを認め、資料増加に応じてさらに文様帯は分類できると考えるから、文様帯の分類群が増えることはあっても減ることはない。となると、その都度、文様帯分類群のメタ・レベルに“変化しない部分”があることを証明しなければならない。だが、それが最終的に“変化しない部分”であるか否かは、全体が既知ではないのだから、残念ながらわからない。故に、文様帯の議論を起こせば果てのない無限退行の議論になる。山内のしたことは文様帯の分類群を増やしたことであって、それらをもとにして由来上の同一性＝“変化しない部分”をきちんと説明したのではない。

気づくべきは、同一性をいい当てるはずの文様帯のそれ自体の分類に手を染めた以上、よりメタ・レベルの説明を求められる続けるという意味での無限退行に山内が陥ってしまったということである。よりメタ・レベルの文様帯の説明は、「誰にも分からない」が本当であると考える。

まとめるならば、縄紋土器の一系統を証明しようとして文様帯系統論を提起した山内は、土器資料の在り方を無視するわけにはいかず、文様帯の分類

へと進まざるを得なくなったが、その瞬間に、〈ここに文様帯がある〉的
文様帯を前提にしているから、今度は分類された文様帯のメタ・文様帯の存在
を論証せざるを得なくなる。文様帯のメタ・文様帯の存在の論証とは、「相同」
の中の真の「相同」あるいは同一性の中の真の同一性あるいは“変化しない
部分”の中の真の“変化しない部分”を論証することだが、文様帯の分類群は
既知ではないために、そこからメタ・文様帯を論定することは無限退行して
行くしかなく、答えは出せないのである。つまり、文様帯系統論によって縄
紋土器の一系統性を証明することは決してできない、ということである。山
内にとって「相同」とは、由来を同じくするというコンテクストから判断さ
れるが、縄紋土器を貫くところのそのような「相同」は証明できないのであ
る。縄紋土器を貫くところの「相同」を証明する前に、一系統がすでに前提
になっていたにすぎないのである。

くどいようだが、

草創期の前半には細隆線（1～4、6）、爪形文（5、9）、或いは縄を押捺し
た諸種の文様（7、8、10、13）がある。これは古文様帯として、ここでは
触れないことにする。しかし後半において回転縄文（1～3、16～24）は
あるが、文様というべきものを持たない。早期のはじめの押型文にも文様
（21、22、25、32）はない。ここに全国的に文様帯の断絶する期間がある。
これを切れ目として、次に早期に文様が生じ、その文様はその後長く幾多
の変遷を重ね、一部弥生式、続縄紋式にまで続いている。……ある型式の
文様帯は前代土器型式の文様帯と連続、継承関係を持っており、次代型式
の文様帯の基礎となる。（山内 1964b：157）

と文様帯の変遷を解説する文章は、よく引用されるが、難点に満ちあふれ
ていたことを説明しておく。

山内は〈ここに文様帯がある〉的
文様帯を前提に議論を試みるのだから、
古文様帯がはじめにあってその後
に紋様がなく、「早期のはじめの
押型文にも文様はない。ここに
全国的に文様帯の断絶する期間
がある。これを切れ目として、次
に早期に文様が生じ、その文様
はその後長く幾多の変遷を重ね

云々は、観察者側にはみえなくても文様帯が続いていると述べたことになる。観察者側にはみえなくても文様帯が続いているという山内の判断は、判断基準が知覚できる形質ではない以上、実際は一方的な議論になり、他者には何をどうみていいのかわからないはずで、本当は同意も否定もできないのである。山内の文様帯系統論は、山内以外には理解できないものであったと考える。

他方、もし〈ここが文様帯である〉的文様帯を前提にするならば、引用した指摘は文様帯には一系統的な続き具合がないと言明したに等しい説明となる。他者にも分かる議論としては〈ここが文様帯である〉的文様帯を前提にする限り、文様帯の一系統的連続性・同一性は否定されたことになる。

とどのつまり、今引用した山内のこの有名な説明は、文様帯の同一性・〈縄紋土器全般に通ずる型式学的系統・紐帯・筋金〉を証明してはいないのである。

確認するが、山内の〈ここに文様帯がある〉的な文様帯系統論はどこまで行っても根拠を提示できない仕組みになっていたのである。平たくいえば、山内の文様帯系統論は無根拠である。

VI. 縄紋土器一系統説〔3〕一型式の漸進的変化

山内清男は縄紋土器型式の変化が漸進的に生じるという立場だが、ダーウィンが『種の起源』で生物種の変化は漸進的であることを主張し、そのダーウィンの主張を取り入れてモンテリウスが人工物の型式変化が漸進的であることを説いたことを受けてのことであった³⁾。1922年に『通論考古学』を著した濱田耕作（モンテリウスの紹介者）も、人工物の型式変化が漸進的であることを前提にしていた（濱田 1984 [1922]：復刻版146-147）。著名な先達たちが漸進主義の立場を表明していた科学的な学問環境下で、山内が漸進主義の立場を取ることはきわめて当然であろう。

ここで検討したいのは、YSJモデル（表1）の草創期から晩期までの大別に含まれる細別型式群の編成原理である漸進主義である。漸進主義のもと、

型式変化がどうして生じるのか、そのメカニズムに関する山内の主張（山内 1935：83）の要点が、以下である。

- ①土器は、粘土を原料として存分形の変化を作り得るから、変遷しやすい素質がある。
- ②土器は、壊れやすく常に新たに作られ補充されるために、新陳代謝が盛んで、年代的変遷に拍車をかける。
- ③粘土は大概のところであって入手しやすく、その土地で土器は製作できるから、地方色が生まれる。
- ④土器は、惜しげなく捨てられ、かつ、腐らないから、比較的時代の揃ったものを遺物層から得やすい。

山内は、土器は粘土製の品物であることから、変遷しやすい素質がある上に新陳代謝が盛んで、その年代的変遷に拍車がかかり、かつ、地方色も生まれやすい（①②③）と理解し、土器は年代的・地方的単位（型式）となるものを得やすい（④）から、先史考古学の恰好の研究対象と理解していたのである。しかも、新陳代謝は、細胞自体の入れ替わりを意味し生命維持に不可欠な仕組みであるから、山内は、土器を生物とみなしていたことも確認できる。また、山内にとって型式はすべて等価であるから（大塚 2000：67-69）、日本列島各地での間隙ないしは空白がなく続く型式群（縦の関係）からは、一定の律動の変化すなわち漸進的变化が導き出される訳である。と同時に、先後に間隙ないしは空白がなく続く型式群（縦の関係）からは、“正確な目盛り”が導かれるはずである。

変化の原因は縄紋土器に内在しているという論理型式になっているから、いや、土器を生物と類比的存在と見なす漸進主義の要請にしたがった結果、山内は、みごとに型式変化が漸進的であることと変化の原因は縄紋土器に内在しているという論理を構築した訳である。

表2をみながら、説明したい。日本列島のある地方を例にとると、そこには漸進的に連綿と変化する型式群の連なりがあり、しかも、このような連鎖的在り方は列島内のどの地方でも同じで、各地方にはそれぞれに漸進的に変

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根?× (+)	ひじ山 柏畑		黒島×	戦場ヶ谷×	
前期	石川野×	円筒土器 下層式 (4型式以上)	室浜 大木1 〃 2a,b 〃 3-5 〃 6	蓮田式 花種下 関山 黒浜 諸磯a,b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	鈴ノ木×	国府北白川1 大森山	磯ノ森 里木1	轟?	
中期	(+) (+)	円筒上a 〃 b (+) (+)	大木7a 〃 7b 〃 8a,b 〃 9.10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利E 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里木2	曾畑 阿高 出水?	
後期	青柳町×	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利B 〃 安行1. 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川2×	津雲上層	御手洗 西平	
晩期	(+)	亀ヶ 筒式 (+) (+) (+)	大洞B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,X	安行2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮滝× 日下×竹ノ内×	津雲下層	御領	

註記 1. この表は仮製のものであって、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相当する式があるが型式の名が付いていないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と関連する土器を出した遺跡名。

表2 山内清男による縄紋土器の年代的組織〔型式群の縦横配置〕(山内 1937 [一部改変])

化する型式群の連なりがあった、となる。しかも、ある地方のある型式に必ず並行する別地方の型式があって、そのように並行するそれぞれの地方の型式はみなそれぞれ固有の場所におさまって異所的に存在した、となる。漸進的変化と異所的布置の存在性格が山内の説く縄紋土器型式群である。そして、縄紋土器に関するすべての事象は型式を基準として把握され、これらの型式群が縄紋土器の多様性の実態と受けとられる。

山内の1969年の所説を熟読する限り、「つぎに注意しなければならないのは、文物が地方によって変化していることである。『所かわれば品かわる』ということは、人類の遠いむかしからあったものようである。日本の縄文時代でも遺物の地方差がみられる。とくに縄文式土器のような粘土でつくり、形態や装飾を思うさまに変化させることのできるものでは、時代による差ばかりでなく、地方差がこれまたいちじるしい」(山内 1969a : 87)、という

発言と同じ内容は、1935年に、すでに述べられていたのだから（前掲①②③④参照）、山内は型式変化の生じるメカニズムに関して一貫した理解を有していたと考えるべきだろう。

まとめるならば、〈縄紋土器型式の変化は、粘土の特性から常に惹起され、粘土の特性よって変化の様態は宿命づけられている〉、と要約できるだろう。しかも、変化の原因は縄紋土器に内在しているという論理形式になっているから、縄紋土器は、〈時が経てば自ずと変化し〉・〈ところ変われば自ずと品変わる〉という存在性格が付与されていることになる。山内のこの立場を、筆者は“粘土特性生成宿命論”と呼ぶことにしている。山内にとっては、〈時が経てば自ずと変化し〉・〈ところ変われば自ずと品変わる〉という縄紋土器だかれこそ、「相同」を追求する文様帯系統論（漸進的変化の型式群⇒文様帯系統論⇒縄紋土器一系統説、という具合にである）に山内が思い至ったと推測している。

だが問題は、〈変化のメカニズムがモノに内在する〉という論理形式にあると考える。なぜならば、変化は時の経過に比例するという類の認識が容易に生じてしまうからである。変化と時の経過とが同義となってしまう、時の経過が変化の原因という本末転倒な歴史認識を許容してしまうのである。つまり、土器を作れば作るほど、自然に土器の変化が起こってしまうというのが“粘土特性生成宿命論”の論法である。原因が結果に直ちになり、その結果が直ちに原因になるのだから、漸進主義の立場に立つ限り、事象の変化を事象に内在する問題としてしか扱えずしかも時の経過との関係でしか議論できなくなる次第である。

わたしたちが問題としている縄紋土器は往時の人びとが製作した明らかに人工物のはずである。人工物を生物との類比で認識する山内の姿勢に陥弊はないのだろうか。上記したように、変化と時の経過との関係を内在するような人工物があり得るはずはないであろう。もし、あり得ると受けとる研究者がいるならば、その研究者には本来的な意味での因果関係を究める思考が欠落しているとしか思えない。つまり、山内のような漸進主義的立場の縄紋土

器が何らかの歴史的事実をいい当てていると考えるのは、いささかいかばかりすぎではなからうか。

漸進的な型式変遷を強調すれば、因果関係を内在的に捉えてしまうことを許容してしまう。そうすると、時の経過に比例して型式の変化が起こるという認識を肯定することになる。これでは、変化が起きるのは時が経過するからだという本末転倒な歴史認識に帰結してしまうのである。

批判すべきは、型式変化のメカニズムが土器に内在するとしたことで、土器を作れば作るほど、自然に変化が継起してしまうという論法を提出してしまったことに山内が終生自覚的ではなかったことである。と同時に、日本考古学（敗戦後考古学）にたずさわる人びとにとっても、山内の論法に自覚的ではなかったことである。ハイパー縄紋文化は、漸進的な型式変遷観に対して批判的ではなかったこれまでの無責任な風潮の帰結であったと考える。

まとめ

型式変化の漸進主義のもとで山内清男によって縦横に巧みに編年された型式群（縄紋土器の年代的組織：表2）および文様帯系統論で仕上げられた縄紋土器一系統説は、よくよく考えれば——しかも、渡来土器の探索を最終的には放棄した——まことに根拠のないものといわざるを得ない。となると、年代観を別にすれば、いまだに多くの研究者にとって範例であり続ける山内の縄紋文化・YSJモデル（表1）は、もともと根拠のないつまり実のない名ばかりのものといわざるを得なくなるのである。

視点をかえて、漸進主義とは別に、元来、どういう枠組みを山内が保持しているかに関わる発言として、以下の発言に注目したい。

小金井博士はアイヌを人種の島と云われたが、僕は縄紋式文化圏を文化の島と考えて居ります。そして、この文化圏の一端であった北海道及びその附近にアイヌが居り、反対の端である琉球の住民も屢々これに似た体質を持つ様に云われて居ります。この点で、人種的に南とも、北とも続かない

訳です。元来の縄紋式文化圏の住民の人種関係はこの様な処から若干想像され得るではないでしょうか。しかし、アイヌと云い切るのは如何かと思う。仮に縄紋民族とでも云って置いて、地方により、又年代による住民の体質の変化を調べて行くのが順序でしょう。兎に角、縄紋式文化圏——僕はこれを戯れに縄紋国と称して居るが——これとアイヌとの関係が問題です。両方共東亜に名誉の孤立をやって居る訳ですな。縄紋式文化の源流と共に、その住民、引いてはアイヌの所属、渡来の問題が一緒に考慮されねばならないと思って居ます。(山内ほか 1936: 46)

山内にとって、縄紋土器が一系統的な変化を遂げたことを説くこと(表2)は、固定あるいは一定した領域が所与でなければならぬはずで、〈縄紋式文化圏—文化の島—孤立—縄紋国〉という認識は、外からは孤立的で内には一定し安定した文化圏を意味している。原理的に考えれば、一系統性の認識は、外からは孤立的で内には一定した文化圏を所与としてはじめて可能となるはずで、山内がきわめて理念的な枠組み〈縄紋式文化圏—文化の島—孤立—縄紋国〉を把持した帰結が、YSJモデル(表1)と考える。YSJモデルを資料的に支えたのが、細別型式を縦横に配置した縄紋土器の年代的組織(表2)である。

山内にとっては、孤立が平和と同義であり、縄紋文化とは大陸からは孤立的な存在であり、かつ、この文化を育む場は日本列島〈内〉に限ることを倫理規範化していたことに特徴があるといえよう。山内は自己の学問の使命に従い、縄紋文化の由来は大陸のどこかの新石器文化にあること、縄紋文化は日本列島内で完結していること等々の一系統説にそった論点の証明を倫理規範化することで先鋭化していたと思われる。主著である『日本遠古之文化』(山内 1939)は平和な「縄紋国」「文化の島」を構想したのであって、1930年代から1945年の間(戦間期)、山内は平和な〈島国日本〉的の日本文化論の立場に立って論陣を張ろうとした希有な考古学者であったことにわたしたちは早く気づくべきであろう。

日本考古学(敗戦後考古学)は、山内を、1930年代から1945年の間(戦間

期)、世情にうとく実証的な研究に邁進した者とみなしたことで(例、近藤1964;坂詰 1997)、完全に山内の評価を見誤ったと考える。そして、山内の評価を完全に見誤った帰結として、〈想像された日本列島〉で〈1万年以上もどのような気候環境下でも存続し続けた〉とされるハイパー縄紋文化が出来てしまった、と認めるべきであろう。

今日的に振りかえる限り、〈島国日本〉的の日本文化論のYSJモデル(表1)は、もはや失効したと正しく理解して、実のないハイパー縄紋文化を描き続けるのではなく、あらたな方策を考えるべきであろう。

小論は「資料論」からはほど遠い議論のように思う向きもあるが、日本考古学(敗戦後考古学)が認識枠ないしは参照枠と考古資料とのかわりを議論して来なかったために、何を見誤って来たのか、その前景化を試みた。考古学にとっての「資料論」とは、〈資料を虚心坦懐にながめる〉ことではない。本当は、痕跡的で断片的で匿名的な考古資料の有効活用のためには、認識枠ないしは参照枠を終始点検し続けなければならないのである。

なお、あらたな方策について、微力ながら、筆者は無為無策ではない旨付言しておきたい。拙論(大塚 2000、2014、2015、2016)に一瞥いただければ幸甚である。

また、文末ではあるが、以下の方々から常々ご教示いただいたことが小論につながった次第である。記して謝意を表したい。とくに、後に記した金沢大学のお二人には、筆者の考えを公表した際に⁴⁾、種々のコメントを頂戴した。それらは、小論執筆を強く後押ししてくれた次第である。ただし、誤りがあればすべて筆者の責任である。

佐々木藤雄、土居通正、黒澤 浩、村田章人、建石 徹、長田友也、吉田泰幸、ジョン=アートル

註

- 1) 考古資料の性質については、明治時代の御雇外国人教師であるモースが重要な指摘をしていたと考える。モースは、大森貝塚の発掘調査報告書(モース 1983[1879])

中において、「人類の過ぎ去った歴史を、地中に埋まった状態で発見される断片的な遺物から復元することはまったくむずかしい。洞穴や墓地や村のごみため、その他似たような場所でくさらずに残った物だけから、生活の歴史を組み立てていかなければならない。当時の人たちは、書いた記録も解説すべき象形文字も残していない。いやはじめからもっていなかったのだ」(モース 1983 [1879]:16)と述べた。筆者の考古資料観(痕跡的であること・断片的であること・匿名的であること)は、モースの「くさらずに残った物だけ」から、当時の人びとの生活の痕跡であることを導きだし、「地中に埋まった状態で発見される断片的な遺物」から、文字通り断片的であることを導きだし、そして、発見されたものをめぐって、「当時の人たちは、書いた記録も解説すべき象形文字も残していない。いやはじめからもっていなかったのだ」から、私たちはそれが何かは分からないから、匿名的であることを導き出したのである。モースの考古資料の性質にかかわる当該発言はきわめて重要な指摘と考えるが、注目する研究者は稀なようである。そもそも、モースが著した大森貝塚の報告書は、先史考古学に関する優れた紹介書の面がある。大森貝塚の報告書の意義については、いずれ、論を起すべきと考える。

- 2) 参考に、山内の所論をつぎに引用する。「無土器末期になると、北方シベリア方面とつながりのある打製石槍、半磨製丸鏝がいったんに使われている。これは温暖な海進期(リトリナⅢ)ののち(約前3000年以後)、冷涼な時期がやってきたために、寒冷地で発達した北方文化がはいつてきたものと考えられる。そして、おなじく冷涼な気候条件のもとで、おなじ北方方面から、より有利な、より強力な縄文文化が伝わることになったと考えられる。このときになって、多くの要素が欠けていた新石器時代に、あらたに土器(縄文式土器)が加わり、石鏝がしめすように弓矢もしっかりしたものとなり、矢柄研磨器も出現した(矢柄研磨器の上限年代が前2500年:引用者註)。中国の新石器時代ははじめから農牧をとめない本格的であるが、縄文文化にはほとんど農牧の存在をしめす証拠がなく、高級狩猟民としての生活を終りまでつづけた」(山内 1969a: 92-93)と。さらに、山内は、「縄文時代の気候の変化とともにいくらかの差があったかもしれないが、川をみたくほどの魚群(サケ:引用者註)の遡上のみすごされるはずはない。もともと、シベリアのサケ地帯から南下した文化をもつ縄文人のことである」(山内 1969a: 93)とも述べた。
- 3) モンテリウスは、「併し総ての組列に共通なことは、各々の型式即ち或る連鎖の各環のものは、その次ぎに位する部分に比べて、余り変化を示していないということである。相互に相隣っている二つの各環の相似は、熟練していない観察者には、その間に相違を認めることの出来ない程に大である。併しその組列の最初の型式と最後の型式とは、普通一見しては何等の関係がないと思われる程似ていないものである。併し全体を詳しく調べるならば、実際時代の新しい形は古い形のものから、恐らくは幾世紀かを要したと思われる漸進的变化に由って出来たものであることを

発見する」(モンテリウス 1932 [1903]: 25) と述べたのであった。

- 4) 2016年12月17日、金沢大学で開かれた文化資源学セミナーで、筆者は「消費される縄紋文化」と題して発表した。金沢大学の吉田泰幸・ジョン=アートルのお二人にはいい尽くせぬほどの学恩をいただいた。小論はかれらへの返礼であると述べたらだけさであろうか。

引用文献

- 今村啓爾 2004 「日本列島の新石器時代」『東アジアにおける国家の形成』、日本史講座1、歴史学研究会・日本史研究会(編)、東京大学出版会、35-63頁。
- 今村啓爾 2014 「世界史における縄文文化の位置づけ」『縄文時代(下)』、講座日本の考古学4、今村啓爾・泉 拓良(編)、青木書店、652-669頁。
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』、同成社。
- 大塚達朗 2007 「型式学の射程—縄紋土器型式を例に—」『現代社会の考古学』、現代の考古学1、岩崎卓也・高橋龍三郎(編)、朝倉書店、184-201頁。
- 大塚達朗 2013 「縄紋時代のはじまり(草創期)—そのアポリアー—」『縄文時代(上)』、講座日本の考古学3、今村啓爾・泉 拓良(編)、青木書店、119-147頁。
- 大塚達朗 2014 「隆起線紋土器における広域連動—花見山式の再設定および三角山式の設定より—」『物質文化』94: 1-28。
- 大塚達朗 2015 「福井洞穴の爪形紋土器」『物質文化』95: 171-190。
- 大塚達朗 2016 「消費される縄紋文化」『物質文化』96: 89-110。
- 近藤義郎 1964 「戦後日本考古学の反省と課題」『日本考古学の諸問題』、考古学研究会十周年記念論文集、考古学研究会十周年記念論文集刊行会、311-338頁。
- 坂詰秀一 1997 『太平洋戦争と考古学』、歴史文化ライブラリー 11、吉川弘文館。
- 佐藤宏之 2013 「日本列島の成立と狩猟採集の社会」『原始・古代1』、講座日本歴史1、大津透ほか(編)、岩波書店、27-62頁。
- 佐藤宏之・山田 哲・出穂雅美 2011 「旧石器時代の狩猟と動物資源」『野

- と原の環境史』、シリーズ日本列島の三万五千年——人と自然の環境史2、佐藤宏之・飯沼賢司（編）、文一総合出版、51-71・319-321頁。
- 瀬口眞司 2014 「縄文文化論の理論的基盤の整理—国際化への布石—」『考古学研究』61(2)：16-29。
- 芹沢長介 1962a 「日本の旧石器文化と縄文文化」『原始社会の解体』、古代史講座2、石母田正ほか(編)、学生社、301-332頁。
- 芹沢長介 1962b 「旧石器時代の諸問題」『原始および古代〔1〕』、岩波講座日本歴史1、岩波書店、77-107頁。
- 芹沢長介 1962c 「土器の起源」『自然』17(11)：29-35。
- 芹沢長介 1969 「日本の旧石器時代 たしかめられた旧石器人の存在」『古代〈日本〉先史—5世紀』、日本と世界の歴史1、田中豊(編)、学習研究社、76-85頁。
- 中村俊夫・辻 誠一郎 1999 「青森県東津軽郡蟹田町大平山元 I 遺跡出土の土器破片表面に付着した微量炭化物の加速器¹⁴C年代」『大平山元 I 遺跡の考古学調査 旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求』、大平山元 I 遺跡発掘調査団、107-111頁。
- 成瀬 洋 1977 『日本島の生いたち』、同文書院。
- 濱田耕作 1984 [1922] 『通論考古学』、復刻版、雄山閣。
- 春成秀爾 2001 「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』40(6)：517-526。
- 春成秀爾 2008 「野生動物の絶滅と人類」『野生と環境』、ヒトと動物の関係学4、池谷和信・林 良博(編)、岩波書店、22-44頁。
- 藤本 強 1985 「年代決定論(1) —先土器・縄文時代の年代決定—」『研究の方法』、岩波講座日本考古学1、近藤義郎・横山浩一ほか(編)、岩波書店、193-215頁。
- モース, E・S 1983 [1879] 『大森貝塚』、岩波文庫青432-1、近藤義郎・佐原 眞(訳)、岩波書店。
- モンテリウス, O 1932 [1903] 『考古学研究法』、濱田耕作(訳)、荻原星文館。

- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1(2)：1-30。
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1(3)：1-19。
- 山内清男 1932a 「日本遠古之文化 一 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1(4)：40-43。
- 山内清男 1932b 「日本遠古之文化 二 縄紋土器の起源」『ドルメン』1(5)：85-90。
- 山内清男 1935 「縄紋式文化」『ドルメン』4(6)：82-85。
- 出内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1(1)：29-32。
- 山内清男 1939 『日本遠古之文化』、補註付・新版、先史考古学会。
- 山内清男 1960 「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』30：1-2。
- 山内清男 1964a 「日本先史時代概説 Ⅲ 縄文式文化」『縄文式土器』、日本原始美術1、講談社、140-144頁。
- 山内清男 1964b 「縄文式土器・総論」『縄文式土器』、日本原始美術1、講談社、148-158頁。
- 山内清男 1964c 「図版解説 87」『縄文式土器』、日本原始美術1、講談社、178頁。
- 山内清男 1967a 「縄紋土器の改定年代と海進の時期について」『古代』48：1-16。
- 山内清男 1967b 「洞穴遺跡の年代」『日本の洞穴遺跡』、日本考古学協会 洞穴遺跡調査会特別委員会（編）、平凡社、374-381頁。
- 山内清男 1968 「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』、金関丈夫 博士古稀記念委員会（編）、平凡社、63-87頁。
- 山内清男 1969a 「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『古代〈日本〉先史—5世紀』、日本と世界の歴史1、田中豊(編)、学習研究社、86-97頁。
- 山内清男 1969b 「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』224：4-22。
- 山内清男・佐藤達夫 1964a 「日本先史時代概説 I 旧石器時代」『縄文式土器』、日本原始美術1、講談社、135-137頁。

山内清男・佐藤達夫 1964b 「日本先史時代概説 II 無土器文化」『縄文式土器』、日本原始美術1、講談社、137-140頁。

山内清男ほか 1936 「座談会 日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』1(1)：34-46。

山内清男ほか 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3：59-80。

Deconstructing the idea of Jomon ‘Culture’: Revisiting the Model of Yamanouchi Sugao

OOTSUKA Tatsuro

Abstract

This article critiques the still generally accepted model of Yamanouchi Sugao which proposed the autonomous development of prehistoric pottery-making culture within the Japanese Archipelago after having arrived from abroad and held Jomon pottery to be a sole component developed from a single source.

The following problems of Yamanouchi’s views are pointed out; firstly, the impossibility of identifying the pottery initially brought from outside, secondly, the impossibility of substantiating his argument concerning the succession of the band-decoration system of Jomon pottery, and thirdly, his unfounded views on the development of Jomon pottery over time. Given these objections, Yamanouchi’s model cannot be sustained, and consequently the view of Jomon culture based on it also cannot be.